

# 死のポルノグラフィー化と教育

清多英羽（青森中央短期大学）

## 問題の所在

- 1 ゴーラー、アリエスにみる「死のポルノグラフィー」
- 2 ファイフェルにおける「死」に対する現代人の態度
- 3 日本における死のポルノグラフィー化の諸相とその分析
- 4 死のポルノグラフィー化と「いのちの教育」

## 今後の課題

## 問題の所在

「死のポルノグラフィー」という用語の使用は、イギリスの社会学者ゴーラー（Geoffrey Gorer, 1905-1985）がエンカウンター誌に掲載した論文のタイトルに端を発する<sup>1</sup>。20世紀以降のアングロ・サクソン諸国においては、「誕生」や「交媾」（copulation）を口にすることがタブーではなくなり、「死」がそれらに取って代わるようになった。その結果、自然死<sup>2</sup>という、われわれ人間がいつかは迎える、加齢を主因とする死から目を背けるようになった。だが一方で、「横死」や「大量殺人」等のセンセーショナルな死は、その本来的な意味を覆い隠すほど誇張され、人々は覗き見するかのようにならに接する。ゴーラーは、こうした社会的な変化を鋭く指摘し、人々の死に対する態度を、「ポルノグラフィー」を見ているかのような、と例えたのである。ゴーラーのこの説を有名にしたのは、フランスの歴史家アリエス（Philippe Ariès, 1914-1984）の功績である。アリエスはフランスを中心としたヨーロッパ社会の死にかかわる習慣・風俗の変遷を整理し、その時々を生きた人々の死に対する態度の変化を丁寧に辿っていった。そして、ほぼ20世紀を境にして、ゴーラーの指摘通り、一大変化が生じていると論じた<sup>3</sup>。

この後、「死のポルノグラフィー」という考え方は、死生学、社会学、看護医療、心理学等の様々な分野で市民権を得て、思想的な拠所にされ、諸々

---

<sup>1</sup> Gorer, G. The pornography of death. Encounter, October 1955, 49-52.

<sup>2</sup> 自然死とは「老衰によって死ぬこと」（『言泉』）を意味する。病氣や怪我などの要因で不慮の死を遂げることと反対の性質を帯びる。

<sup>3</sup> Philippe Ariès, Essais sur l'histoire de la mort en Occident: du Moyen Âge à nos jours, Seuil, 1975. Philippe Ariès, L'Homme devant la mort, Seuil, 1977.

の研究が実施されている。細部や個々の事象を詳しく検証していけば矛盾が出てくることも考えられるが、日本人の葬送儀礼をはじめとする諸習慣の変容は、死をタブー視することと結びつけて論じられる傾向にあり、日本において、死のボルノグラフィー化<sup>4</sup>が進行している例として紹介されることが多い。

教育分野においては、とりわけ「いのちの教育」の実施時に、死のボルノグラフィー化という考え方が援用されがちである。死について語ることをタブー視し、死と正面から向き合わない現代人の態度は、その主宰者によって、「いのちの教育」を実施すべきであるという理由に採用される。ただし、死のボルノグラフィー化を「いのちの教育」の要件とする理屈に、どれほど正当性があるのかという分析はほとんどみられない。

そこで、続く節では、(1)「死のボルノグラフィー」という用語を世に広めたゴーラーとアリエスの議論を再構成し、(2)死に対する現代人の態度をファイフェル(Herman Feifel, 1915-2003)の議論を参考に整理し、(3)「死のボルノグラフィー」についての日本の各分野の研究者の議論を踏まえ、(4)「いのちの教育」と死のボルノグラフィー化をつなぐ上での問題点を指摘したい。

## 1 ゴーラー、アリエスにみる「死のボルノグラフィー」

ゴーラーは、1955年にエンカウンター誌上で「死のボルノグラフィー」と題する論文を発表した。このわずか5ページほどの論考は、この後21世紀にかけて、歴史の当事者たちにとって知らず知らずのうちに進行していた、現代人の死への態度の変容を浮き彫りにするのに欠かすことのできない視座となった。

ゴーラーはそれまで「社会学的・文化的・政治的なものと見なされる行動や制度のうちに、どのような心理学的要素が含まれているのか」<sup>5</sup>という観点で研究を進めていたが、この論文等においては、「社会の中の人間」を詳らかにするために、「私的で心理学的なものと通例見なされる死別という状況が、どのような社会学的・文化的意味を含んでいるのか」という正反対のアプロ

---

<sup>4</sup> 本稿で「死のボルノグラフィー化」という用語を使用するときには、われわれの社会が自然死をタブー視する一方で、センセーショナルな死を過度に取り扱う傾向が広まった、という意味とする。

<sup>5</sup> G・ゴーラー『死と悲しみの社会学』ヨルダン社、1986年、6頁。

ーチを採用した。以下は、論文「死のポルノグラフィー」の要旨である。

社会ごとに異なる、上品さの規則が崩れるとき、はじめて下品さが露呈する。上品さの規則はどの社会、どの時代にも存在する。これに対して、ポルノグラフィー（タブー視された行為を描写することによって生み出される幻想や妄想）は、文字のある社会にしか存在しない。それは「取り澄まし」（prudery）の影であり、一人だけで浸る空想の側面をもつ。過去200年の間、人間の3つの基本経験（誕生、交接、死）のうち、交接と誕生が「口にできないもの」（unmentionable）だったので、それらにまつわる多くのポルノグラフィーが生み出された。一方で、死は依然として不可解なものではあったが、神秘に包まれたものではなかった。子どもにとってですら、死は身近なものであった。ところが、20世紀に入ると逆転現象が起きた。交接は「口にしていよう」（mentionable）ものになったが、自然な出来事としての死は「口にできないもの」になり、つまり死をタブー視するようになった。過去50年の間に、予防医学が進歩したので、平均寿命が延び自然死は先送りにされ、一方で、戦争、革命、交通事故など横死が増加した。われわれは「取り澄ました態度」で自然死と対峙し、一方で横死はセンセーショナルにあおられた結果、映画、小説、劇画に結実することになった。自然死が忌むべきものに格下げされたのは、アングロ・サクソン社会においては、特にキリスト教の来世信仰の弱体化が挙げられる。死はもはや栄光ではなく、単に身体が腐敗することとして眺められるようになったからである。

ゴーラーが明らかにしているのは、現代人の自然死への嫌悪と、その結果生じる「取り澄ました態度」である。18世紀以降、ヨーロッパの公衆衛生はますます向上し<sup>6</sup>、若年層の死亡率は大幅に改善された。出生した人数の大半が成人まで生きながらえる……。人口の増加と共に、産業革命や技術革新により、人々の暮らしは大変革を迎えた。人々は生活の便利さを象徴する変化には敏感だったが、死にゆく人（瀕死者）や死んで間もない人（死別）に対する自分自身の接し方の変化には鈍感だった。

ゴーラーは、この変化が起きた理由を2点挙げている。

ひとつは、アングロ・サクソン社会のキリスト教信仰の弱体化である。毎週教会に通う習慣がある人々であったとしても、来世への幸福の確約を信じている人々がどれほどいるのかは、ニーチェが神の死を宣告した以降の時代

---

<sup>6</sup> ジョン・マクマナーズ『死と啓蒙』小西嘉幸、中原章雄、鈴木田研二訳、平凡社、1989年。

を生きるわれわれならば容易に想像がつくだろう。「死」はもはや栄光ではなく、単に身体が腐敗することとして眺められるようになった。南北戦争以降、アメリカでは死体の防腐処理をするエンバーミングの技術が進化した。日本人は、朝鮮戦争時にその技術に直接触れる機会をもった<sup>7</sup>。死して腐るということへの嫌悪感は、この技術を飛躍的に向上させたのかもしれない。これは、自然の一部としての人間のもつ性質から目を逸らし続けることとも解釈できる。

もうひとつは、医療技術の向上である。現代社会において、すくなくとも先進諸国では、いったんこの世に生を授かれれば、成人まで成長することができる。「生まれること」と「成人すること」とは限りなく等号で結びつけやすくなった。日本の現状をみても、われわれがさらにその先を走っていることが明らかである。新生児死亡率（出生千対）は 77.9（1899 年）から 1.0（2012 年）へ、乳児死亡率（出生千対）は 153.8（1899 年）から 2.2（2012 年）へと、いずれも激減した<sup>8</sup>。加えて、2011 年の男性の平均寿命は 79.44 年、女性の平均寿命は 85.90 年であり、1955 年の男性 63.60 歳、女性 67.75 歳に比べてこちらも激伸している<sup>9</sup>。われわれの生き延び方は「はじめほど死にやすく老いる前に死ぬ」から、「はじめも死にくく老いても死ににくい」に変化した。それどころか、いまや高齢者たちは、本人が望もうと望ままいと生命の維持に必要であれば、胃に穴を空け、養分を直接体内に送り込まれまでして、死ぬことを免れる<sup>10</sup>。この際、当事者の QOL はあまり考慮に入れられず、医師は過失をあげつらう基準となる法律におびえながら、医療行為を続けること自体を目的にして医療行為を続ける<sup>11</sup>。ボーヴォワール（Simone de Beauvoir, 1908-1986）が、「無防備の哀れな残骸、職業的な手で、さわられ、いじくり廻される物体、その中には生命が、ただ麻痺した無力状態で延長されているにすぎない」と述べたように、この現実とわれわれは向き合っている最中である<sup>12</sup>。

話を戻すと、ゴーラーによれば、人々が自然死から目を背けているという

---

<sup>7</sup> 香原志勢『死と生をめぐる思索 石となった死』清流出版、2006 年。埴原和郎『骨を読む？ある人類学者の体験』中公新書、1965 年。

<sup>8</sup> 厚生労働省『平成 24 年 人口動態統計月報年計（概数）の概況』

<sup>9</sup> 厚生労働省『平成 23 年簡易生命表の概況』

<sup>10</sup> 石飛幸三『「平穏死」という選択』幻冬舎ルネッサンス新書、2012 年。

<sup>11</sup> 香川知晶『命は誰のものか』ディスカバー携書、2009 年。

<sup>12</sup> ボーヴォワール『おだやかな死』杉捷夫訳、紀伊國屋書店、1995 年、24 頁。

事実は、日常会話の中にも認められるという。以前は、自らの誕生について疑問をもつ子どもに答える場合、例えば「キャベツの中から生まれてきた」などと言っていた。われわれになじみのある言い方をするならば、さしずめ「コウノトリが運んできた」であろうか。ファールブル（Jean Henri Fabre, 1823-1915）がアヴィニョンの市民向け講座で、植物の繁殖作用について説明したことが、卑猥なこととして聴講者から非難された逸話が示している通り<sup>13</sup>、誕生の神秘をおおびらに語ることは、当時、眉をひそめることだったのである。しかし、現代では、誕生については、きわめて科学的、系統的に教わることができる。仮に家庭でその役目が果たせなかったとしても、学校教育の一環として性教育が施されており、教育課程として誕生を単なる神秘として片付けない体制が整っている。NHK や BBC のドキュメンタリー番組では動物の出産が臆面もなくゴールデンタイムに放送される。その一方で、人が死ぬことを子どもに説明する際は「素敵なお庭で休んでいる」「旅に出かけた」などと、今でも婉曲的に表現することが多い。

ゴーラーのこうした考え方を世に広めたフィリップ・アリエスは、死に対する現代人の態度の劇的な変貌を指摘した。アリエスは、ゴーラーに触れ、20世紀以降のフランス社会においてもその大変革が起きていたことに気づかされた。アリエスは、「死がいかにしてタブーになったか、20世紀において主要な禁忌としてのセックスに死がいかにしてとって代わったか」<sup>14</sup>について明言したゴーラーは先駆的である、と述べた。

アリエスの「死」に関する研究は、街を形成してきた人々が墓をどのように配置してきたのか、どのように飾り付けてきたのか、そしてどのようにかわってきたのかについて、古代ローマ時代までさかのぼって、その変化を探ることによって、人々の死に対する態度の変遷を描き出している<sup>15</sup>。その際、19世紀に至るまでは、さまざまに人々の心性は変化していったものの、20世紀に入ったところで、かつて無いほどの大きな変化が起こっていることに気づく。その気づきを与えたのがゴーラーだったのである。

死をタブー視するような態度は、アリエスによれば、20世紀の初め頃にアメリカで生じた。その原因は、「幸福の必要性、悲しみや嘆きのあらゆる原

---

<sup>13</sup> G・V・ルグロ『ファールブルの生涯』平野威馬雄訳、ちくま文庫、1988年、134頁。

<sup>14</sup> アリエス『死と歴史』伊藤晃、成瀬駒男訳、みすず書房、1983年、75頁。

<sup>15</sup> アリエス『死を前にした人間』成瀬駒男訳、みすず書房、1990年。アリエス『図説 死の文化史』福井憲彦訳、日本エディタースクール出版部、1990年。

因を避け、悲嘆のどん底にあってもつねに幸せそうな様子をして、集団の幸福に貢献するという倫理的義務と社会的強制」<sup>16</sup>である。

ところで、人々が死をタブー視し、例えば幼児に「死」の事実を隠蔽しようとする行動は、ポストマン（Neil Postman, 1931–2003）の立論からも説明ができる。

ポストマンは、元来、「子ども」という言葉が血縁関係上の「子ども」を表したが、年少者であるところの「子ども」を意味していなかったことを示した<sup>17</sup>。現代人が使用している「子ども」という言葉が、2重の意味を帯びるようになったのは、一定の時を経て次第に、変化していた結果であるという。「子ども」という言葉に年少者の意味が加えられるようになったきっかけとして、ポストマンは文字の大衆による使用を挙げている。人間が文字を使いこなすためには、そのための発達上の成熟を前提とする。例えば、3歳児は文字を読めず、文字を自由に使いこなせない。論理的な文章を理解したり、作成したりするには、12、3歳以上の発達の成熟度がなければ難しい。この見解は、ピアジェをはじめとする発達段階諸説をみれば、容易に理解されるところである<sup>18</sup>。文字を使いこなせることが大人の条件となり、学校に通って文字を使いこなす練習をしている期間は「子ども」や「未成年」としてくくられるようになった。産業革命以前の西洋社会においては、学校を卒業して大人として認められるというような手続きを踏まなくても、いわゆる徒弟制の下で、社会参加の過程上一人前として認められることが十分に可能であった<sup>19</sup>。それが、読み書きを必要とするような社会に変化する道中に、もともとあった「子ども」という概念の意味に、第2の意味「子どもらしさ」が付け加えられるようになった、という。「子どもだからまだ早い」という方便は、人類の歴史からみれば、きわめて歴史の浅いことなのである。ここで、ポストマンの見解を本稿の趣旨に則って解釈すれば、子どもを「死」に触れさせない（例えば、葬儀に参加させない）のはまだ早いからである、という単純な理屈は、現代人が作り出した「子どもらしさ」の中に組み込まれるのかもしれない。

アリエス、ゴラーは、現代人の死に対する態度の変化を、親たちが子ど

---

<sup>16</sup> アリエス『死と歴史』伊藤晃、成瀬駒男訳、みすず書房、1983年、75-76頁。

<sup>17</sup> ポストマン『子どもはもういない』小柴一訳、新樹社、1985年。

<sup>18</sup> ピアジェ『知能の誕生』谷村覚、浜田寿美男訳、ミネルヴァ書房、1978年。

<sup>19</sup> 紺野祐、走井洋一、小池孝範、清多英羽、奥井現理『教育の現在』学術出版会、2008年。

もを死に触れさせるのを嫌う要因として挙げたが、ポストマン流に解釈すればその要因が示すものが「子どもらしさ」の創出の過程に紛れ込んだと言える。これは、どちらか一方の言い分が正しいという、二者択一の問題であろうか。歴史的な事象は決して単一の方角に向かってだけ進むわけではない。さまざまな条件が重なって今が創出される。われわれの死に対する態度の変化も同様であろう。むしろ、この2つの見解が主要な理由としてふさわしいとみる。

## 2 ファイフェルにおける「死」に対する現代人の態度

ファイフェルは、アメリカの心理学者で、現代人の死に対する態度を明らかにしたことで有名であり、この分野の先駆的な存在として認められている。以下では、ファイフェルの議論を辿りながら、現代人の死に対する態度について論じたい<sup>20</sup>。

ファイフェルによれば、人々が敬虔な信仰を保っていた時代に、死とは消滅ではなく、「扉」だった。中世の人々は、終末論と永遠の神聖な時間を共有していた。しかし、超越的な宗教的見解から疎遠になった現代人は、もはや死を「扉」ではなく、「壁」ととらえている。それと同時に、核家族化が進み、現代人は死の衝撃を受け止めるための支援を、家族から受けにくい状況にある。そして、そうした支援は制度上確立されていない。それだけでなく、われわれは病院で治療を受けずに死んだ人と出会う機会が稀である。いまや、多くの人は病院で息を引きとる。だから、19世紀の一般家庭では普通に行われていた、死体を取り扱う方法や技術が受け継がれなくなっていった。「死」とは、いまや、専門家の扱う事象である。その間に、テレビや映画では死が目立って扱われるようになった。

ファイフェルが指摘する通り、核家族化の進行は家族で葬儀を取り仕切ることを難しくしている。日本の現状を見ても、葬儀のありかたは20世紀中に大きく変わった。「死」の取り扱いが専門業者に託され、その分、死者と遺族の関係には一定の距離が保たれるようになった。そして、悲嘆に暮れる遺族をなぐさめ、気持ちを共有しうる家族は、葬儀後ほどなく散逸する。悲しみ、悼むことは、無言の圧力で見えないように強制される。ファイフェルの言うように、ある人が亡くなって、それですべてが終わるわけではない。死

---

<sup>20</sup> Herman Feifel, *Death in contemporary America, New meanings of death*, MacGraw-Hill Book Company, 1977.

の痛みは残されたものの間で広がっていく。悲嘆や哀悼は近年短縮の傾向にある。それらは自己耽溺ではなく、われわれに必要な表現の一つである。愛する人が亡くなり、悲嘆に暮れることができなければ、その後の長い期間、喪失感を引きずるということは明らかになっている。この悲嘆は1年ほどもつづくというのに、我々の社会ではせいぜい1ヶ月程度しか許されず、支援も受けられない。

2歳児がすでに死の観念と戦っているように、死は誰にでも起こり、人々はそれを空想してきた、とファイフェルは言う。子どもたちから死を隠しても、それは彼らの感情的な発達を妨げるに過ぎない。子どもたちは、死の現実性の認識によって、より世界の意味を知りやすくなる。老年期の人々も、同様に、死について考える機会をもつべきだが、何らかの事情でそれが妨げられれば、後退的で不適当な行動パターンを示すことになる。

ファイフェルが懸念するのは、幼児に死の事実を隠蔽する行為である。無論、必要以上に怖がらせる必要はないが、隠蔽が良からぬ結果を生むことは明言されている<sup>21</sup>。この行為は、アメリカでは、現代人の死に対する態度としてよく引き合いに出される。この例を根拠に、死をタブー視する現代人の態度を問題視する論調も出てくる。

医療の進歩は、ファイフェルによれば、致命的な病気の進行を食い止め、死ぬまでの時間を稼ぐことを可能にした。それは、治る見込みの薄い人々にとっては、「人間性の剥奪」の問題を引き起こした。われわれは病院にすべてを任せるようになり、われわれの運命は個人の死というよりも病気の死といった方が適切である。生命を救うことが医療従事者の最高の目標である限り、この状況は続きかねない。しかし、不幸なのは、瀕死者が精神的、感情的に孤立して死なざるを得ないということである。死にゆく人は「市民権」を取り戻す必要がある。死ぬことの本質は、生物学的な過程であるだけでなく、心理社会的な過程でもある。

ファイフェルの提示するこの問題点は、現代人の死に対する態度が反映されている。医療至上主義が跋扈する現代社会において、人間性の回復はさまざまに議論を呼んでいる。死をタブー視することと、医療技術の加速度的な進化によってもたらされる、われわれにとっての喫緊の課題だと言えよう。

---

<sup>21</sup> Myra Bluebond-Langner, *Meanings of Death to Children, New meanings of death*, MacGraw-Hill Book Company, 1977. Carol C. Ordal, *Death as seen in books for young children*, Death Education, 1980.

以上のような、ファイフェルの議論をまとめると、現代人は「死」の扱いを家族の領域から専門家の領域へと移し、それに伴って、人間性の剥奪の問題や悲嘆、喪といった習慣の変化の問題、幼児や高齢者に対する死の告知の問題に直面している、ということである。ファイフェルは、ゴーラーやアリエスの指摘した「死のボルノグラフィー」や「死のタブー視」が引き起こす具体的な諸事象を描き出していると考えてよいだろう。

### 3 日本における死のボルノグラフィー化の諸相とその分析

前節まで、イギリス、フランス、アメリカの著名なこの分野の先駆者たちの論文を参考に、「死のボルノグラフィー」や「死のタブー視」と言われる一連の現象が、いかにして現代社会に浸透しているかについて論じてきた。ここからは、日本の実情に触れていきたい。

日本で「死のボルノグラフィー」という考え方が紹介されて以降、死のボルノグラフィー化を懸念する声は多くある。というのも、ゴーラーやアリエス、ファイフェルの指摘と類似した現象が日本において多く見られるからである。

例えば、戦後の日本における葬儀習俗の変化を考慮すれば、われわれの社会が死を遠ざけようとしているとみえないこともない。われわれは、家族の誰かがなくなったとき、通夜や葬式を営むが、その様式は年々簡略化の傾向があるのは周知の通りである。死を悼む機会は限局され、身内だけの密葬、家族葬がますます広がっている<sup>22</sup>。密葬、家族葬が流行る要因としては、超高齢化社会となり、亡くなった者の知り合いがそもそも少なく、いたとしても葬式に参列するだけの身体的な能力に乏しい、葬式を大々的に出すことによって生じる煩わしさを避けたい、などが考えられる。一概に、この現象をみて、われわれが「死」とともに向き合わなくなっているとは断言できないが、われわれの周りで生じている一例でありうる。

われわれが死にゆくそのありようにも、戦後、大きな変化があった。われわれはいまや死の今際の際には、病院のベッドに横たわっている。医師が、死亡宣告をする瞬間をもって、遺族は死を悟る。その時点までは、医師が力を尽くし、心肺蘇生をし、AEDで電圧をほとばしらす。死は、家族の扱いの領域ではなくなり、医師という信頼に足る他人が管理するようになった。家で最期を迎えないということは、近隣の住人とはお別れを言いにくい状況下

---

<sup>22</sup> 第一生命経済研究所『Life Design REPORT 2007 年 11-12 月号』

に置かれるということである。一部には終末期には自宅療養にうつるという動きも見られる<sup>23</sup>が、現実問題として、依然、病院死が多い<sup>24</sup>。

加えて、日本人の「喪」に関する習慣も、戦後、劇的に変貌した例である<sup>25</sup>。お歯黒などの習俗は、もはや時代劇の中にしか存在せず、黒づくめの装束で一年を過ごすことやその他の重厚な諸習慣はわれわれの文化の中から閉め出されているようである。唯一、我々の習慣の中に残っているのは、年賀状のやり取りを控えることくらいである。ゴーラーも指摘しているように<sup>26</sup>、我々の社会は喪に服する人にどのように接してよいのかすでに分からない次元にまで到達している。そして、そうした葬儀の場に、幼児を出席させるかでもめるのも、現代的な特徴だと言わねばならない。そもそも、死はもともと人間にとって不可避な、ごく自然な現象だったはずなので、幼児といえども、葬儀の場から排除する積極的な意味は無いはずである。こうした曲解が生じてくるのも、戦後の日本社会の特徴的な出来事だと言えるだろう。

しかしながら、その一方で、われわれの親しむマスメディアには、多くの「死」が氾濫している<sup>27</sup>。英雄的死、交通事故などの横死、センセーショナルに祭りあげられる、テロリズム、非業の死。これらの死は、現実にはわれわれがいつか迎えるであろう「死」とは性質が異なり、われわれはどこか他人の振りをしながら「死」をみつめている。一方で、われわれがある程度の年齢になるまでに、身近な人間が死亡し、それに立ち会う確率は年々減少した。幼児の成人に至るまでの死亡率は劇的に改善され、公衆衛生と現代の医療技術の向上により、われわれはほとんど成人まで死ぬことはなくなった。センセーショナルな死は身近に増えたが、「身近な死」は減ったのである。

井上章一は『霊柩車の誕生』の中で、日本人や葬儀儀礼の変化を明治時代から戦後にかけて葬列から霊柩車へと至る流れを詳らかにした<sup>28</sup>。この中で、明治大正期に日本の各地で記録として残っている葬列の派手さ、きらびやか

---

<sup>23</sup> デーケン、飯塚眞之編『日本のホスピスと終末期医療』春秋社、1991年。サンドル・ストダード『ホスピスムーブメント』高見安規子訳、時事通信社、1982年。

<sup>24</sup> 自宅で亡くなった場合、かかりつけの医師などに死亡宣告を受ける必要がある。そうでなければ、死後に警察による立ち会いが必要になり、様々な意味で労力がかかることになる。つまり、「死」とは個人の自由に扱える範囲が狭いと言えよう。

<sup>25</sup> 新谷尚紀『死と人生の民俗学』曜曜社出版、1995年。

<sup>26</sup> G・ゴーラー『死と悲しみの社会学』ヨルダン社、1986年。

<sup>27</sup> ポストマン『TVニュース 七つの大罪』田口恵美子訳、クレスト社、1995年。

<sup>28</sup> 井上章一『霊柩車の誕生』朝日新聞社、1990年。

さは過度なものだったが、市電が走るようになって葬送がいわゆる迷惑行為に該当するようになり、代わりに霊柩車が誕生した、と結論づけている。その霊柩車は、葬列の派手さを引き継いだ、やがて次第に、質素になり、今では注意してみなければ、霊柩車かと見まごうものもある。霊柩車のきらびやかさは、死からその「らしさ」を奪い去り、センセーショナルに扱うことによって、ポルノグラフィ的に扱ったと言えなくもない。また、霊柩車に先立つ、派手な葬送は、これもまたポルノグラフィ的な要素にあふれているように見える。

井上氏は、日本でポルノグラフィ化が起きているのかという問いについては、きわめて慎重な立場である。断定を避けながら、上記のように、憶断としてまとめている。

波平恵美子氏は、日本人が「死をタブー化し、忌避し、真っ向から取り組もうとしない」と考える風潮に疑問を呈している<sup>29</sup>。波平氏の主張を要約すると次のようになる。

戦後であっても、日本人は「死をタブー視し、忌避する」のではなく、本来的に「死に慣れ親しんだ」人々である。ただし、日本人自身が「死をタブー視し、忌避する」というような印象をもつに至る背景には、次の3つの要因が考えられる。一つ目は、医療現場における「告知」である。末期がんの患者に対する医師の告知は、その是非について、家族を巻き込んで話し合うことが多い。その際、家族からの理解を得られず、告知を避けるというケースが話題になった。こうした事例から「日本人は死と真正面から向き合わない」と評されるようになったと見なされるようになった。二つ目は、終末期医療が必要とされる患者やその家族のために、専門施設への病床の移動や、死期の過ごし方について語ることが、精神的ストレスとなり、「日本文化には死について語り合う方法・手段がない」ということが明らかになった。三つ目は、人々の間での葬送儀礼の意味の喪失である。遺体や遺族が穢れの対象として見なされ<sup>30</sup>、その結果喪に服する人々が公式な場から一時的に排除される習慣が喪失し、あたかも死を素通りしているかのような印象を与えるに至った。

---

<sup>29</sup> 波平恵美子『日本人の死のかたち』朝日新聞社、2004年。

<sup>30</sup> この点について波平氏は「死を『穢れ』の状態をもたらすものとみなし、死者儀礼によって死者の霊からその穢れを取り除いて死者を安寧な状態にするという、儀礼的表現や行為は、日本の死の文化の大きな特徴である」（『日本人の死のかたち』朝日新聞社、2004年、20頁）と述べている。

特に2つ目までの背景が、日本人が死と向き合わなくなって、タブー視しているということの根拠として示される立場に、波平氏是否定的である。本来日本人は、独自のやり方で死者と向き合う文化を持っているのにも関わらず、現在は、いわゆる「死の医療化」<sup>31</sup>によって、つまり医師や医療関係者のみが「死」を使う専売特許を持つという趨勢によって、あたかも日本人が死を忌避し、タブー視しているかのように見えるだけだとされる<sup>32</sup>。つまり、「何らかのかたちで医療にかかわる人々によって、『日本人は死と向き合わずに忌避する』と繰り返される言説は、『死の医療化』を助長し、伝統的な死の文化を排除している」のであり、この現象を見て、直ちに日本人が死をタブー視し、忌避していると断定するわけにはいかない、というのが波平氏の主張である。ただ、内実はどうあれ、日本人がゴーラーやアリエスの指摘するような社会的な流れに位置づけられることは認めているようだ。

澤井敦氏は、日本人に限定しているわけではないが、死がタブー視される様相をゴーラーやアリエスの見解を参考にしながら4つに整理している<sup>33</sup>。一つ目は、「病院」である。病院では、家族が死にゆく患者に身体的に近づき、精神的な関わりをもつことが制限される。それは、家族の不安感である場合もあるし、医療行為をする側の都合である場合もある。不安を解消するための「死の物語」はすでに用意されておらず、場合によって、患者は死なない振りをすることすら強要されうる。二つ目は、「葬儀」である。葬儀において、遺体はエンバーミング処理され、本来われわれが遺体に対してもつイメージは功名に隠蔽されている。三つ目は、「死別」である。われわれは死別した人との関係に当惑感を抱く。先の病院における死にゆく患者に対してもった印象と同じく、われわれは「死の物語」を持たないがゆえに、悲しみを表出することすら止めてしまう。四つ目は、日常会話である。「日常会話」において、例えば親が子に死を教えるとするれば、親自身の死の可能性を念頭に置いて話をするので、その際、「死の物語」を持たなければ、ここでもやはり当惑することになる。澤井氏は4つの例をまとめて、死をタブー視することの実質が、「死を帯びる者」(死にゆく者、死んだ者等)と関係を持つことへの忌避であ

---

<sup>31</sup> イリイチ『脱病院化社会—医療の限界』晶文社、1979年。

<sup>32</sup> 死を「穢れ」として見なす日本人独自の文化は、古来より連綿と続くが、これをもって死をタブー視していることにはならない、というのが波平氏の立場である。むしろ、「穢れ」として扱うことによって、日常生活の中に取り込み、同時に排除していく過程を経験することが、「死」と慣れ親しむ日本人なりの方法だとしている。

<sup>33</sup> 澤井敦『死と死別の社会学』青弓社、2005年。

ると述べている。

「死のポルノグラフィー」がどのように浸透しているのかについては、様々な議論のあるところだが<sup>34</sup>、すくなくとも死をタブー視するという傾向は、現代の日本においても、「死を帯びるもの」との関係性への忌避という点で確からしいと言えそうである。

#### 4 死のポルノグラフィー化と「いのちの教育」

われわれは、ゴーラーやアリエスの言う意味での死のポルノグラフィー化の浸透した社会の中で暮らし、その端緒でもある死のタブー視も知らず知らずのうちにしている。そしてこの影響による様々な着想は、とりまなおさず、教育の分野においても見られる。

例えば、その代表格は「いのちの教育」や「いのちを大切にする教育」、デス・エデュケーションなどでくられる一連の教育方法・内容（以下、いのちの教育）である。「いのちの教育」の実践者たちは、「いのちの教育」を実施するのに先立って、なぜ「いのちの教育」を現代の子どもに対して行うべきなのかを構想する。これをないがしろにすれば、彼らは特に何の理由もないまま、思いつきで、子どもたちに教育を授けることになるので、これは本質的に、避けては通れない道である<sup>35</sup>。

「いのちの教育」の実践者たちが記録した様々な媒体を辿って、彼らの提示した、「いのちの教育」を行うための根拠を調べていくと、そこにはいくつかの典型が存在する。ひとつは、現代人は死に触れる機会が少ないというパターンである。また、ひとつは、メディアで生命が軽々しく扱われるようになり、生命の価値が下がっているというパターンもある。さらに、中には、殺戮をテーマとした FPS ゲーム<sup>36</sup>などで、主人公が命を落としても生き返ることができるというルールから錯覚し、生命のあり方を誤解してしまうというパターンもある。どれをとっても、科学的な教育理論として飛躍がみられたり、根拠があいまいであったり、これらの典型を「いのちの教育」の実践理由の軸に据える教育者は、耳当たりが良く誰にも認めてもらえそうな理由を、特に吟味することなしに拝借したにすぎない。

---

<sup>34</sup> 宇都宮輝夫『生と死の宗教社会学』ヨルダン社、1989年。

<sup>35</sup> 清多英羽「学校教育におけるデス・エデュケーションの対症療法的な導入根拠に関する批判的考察」（『青森中央短期大学研究紀要』24号、63-70）、2011年。

<sup>36</sup> First Person shooter の略称。主人公の視野の範囲がテレビ画面に映し出され、銃器を駆使して敵を殲滅するタイプのゲームである。

死に触れる機会が現代人にとって減少しているのは、戦後の、生活習慣・習俗や産業構造の変化<sup>37</sup>を考慮に入れば、見紛うことなき事実である。われわれは人間の死に限らず、家畜の屠殺など動物も含めて、死の瞬間を目撃せずに済む。核家族化の進行や病院死の増加<sup>38</sup>により、祖父母の死に寄り添えないことに関してや、乳幼児の死亡率の劇的な改善により家族が失われにくいことに関しては、いまやあまりにも当然のことすぎて、当然という自覚すら人々はもたないだろう。

ところで、学校教育において、現代の日本人が死に触れる機会が減ったから「いのちの教育」をするべきだ、という理屈は成り立つだろうか。おそらく成り立つまい。ここには論理的な飛躍がある。死に触れる機会の減少と「いのちの教育」との間には、両者を有機的に結びつける確固たる理論が必要である。ただ、この問題にじっくりと取り組んだ「いのちの教育」の導入理論に関する研究は非常に少ない。現代人が死に触れる機会が減ったがゆえに、われわれの社会が教育を必要としているというのであれば、定めしその根拠を示す必要があるだろう。その根拠が単に、従来とは異なる文化、習慣の中で若者が育つことに対する不安にすぎないのであれば、まったく理由には当たらない。それはあたかも若者の話す今風のイントネーションや言葉遣いに年配者が眉をひそめるようなものである。むしろ鎌倉時代から現代まで、人の感じ方がこの点ではさして変わらないことに安堵感すら持つというものだ<sup>39</sup>。

ポストマンが主張しているように、メディアが死をセンセーショナルに扱うようになったのは事実である。戦争映画やホラー映画、バイオレンス映画、地上波のテレビドラマ等でもそうした現実離れた死は、われわれの暮らしの中では至る所から目に飛び込んでくる。たしかに、センセーショナルな死をスクリーン越しに観る機会は増加したが、この事実をもってわれわれが命を軽視しているという証拠になるのだろうか。スクリーン越しの「センセーショナルな死」の増加と「命の軽視」との間には、大きな溝があり、両者を安易に結びつければ、そこにも論理的な飛躍があると言わねばならない。そもそも、命の軽視という割に、日本人の成年は相変わらず殺人を犯さないこ

---

<sup>37</sup> 厚生労働省『平成 25 年版 労働経済の分析—構造変化の中での雇用・人材と働き方—』、82 頁。

<sup>38</sup> 厚生労働省『人口動態統計年報 主要統計表』、「第 5 表 死亡の場所別にみた死亡数・構成割合の年次推移」、2011 年。

<sup>39</sup> 吉田兼好『徒然草』、第二十二段。

とではトップランナーであり<sup>40</sup>、われわれがいかにも、平時、穏やかな国民性を持つのかを物語っている。また、人殺しのゲームが命の価値をおとしめ、殺人を助長するという批判については、さまざまな立場からの主張があるものの、ゴーラーも指摘するように、それは「短絡的な見方」に過ぎないのだろう。殺人者が、結果として、バイオレンスをテーマにしたゲームで遊んでいたなどの事例はあるが、ランダムに選んだ集団における殺人率とバイオレンスなゲームで遊んでいる集団における殺人率を比較して有為差が出るなどの積極的な材料がない限り、受け入れがたい。

「死のポルノグラフィー」「死のタブー視」という用語が射程に収める範囲は非常に広い。だから、「死のポルノグラフィー」や「死のタブー視」を旗印にして、「いのちの教育」を実施する理由だ、と据えられても、一体「死のポルノグラフィー」「死のタブー視」のどの部分を指しているのちの教育の根拠にしているのか不明瞭である。「いのちの教育」の実践者は、常に、「死のポルノグラフィー」のどの側面をもっているのちの教育の必要性とするのか、責任を持って説明できなければならない。

「死のポルノグラフィー」の生じた背景には、死をタブー視し始めたという現代人の態度の変化がある。死をタブー視して、死を口にするのを憚るようになれば、一層、死にゆく人や死別した人に対して家族や遺族の感じる不安は募るばかりである。死のタブー視には、現実にもそうした負の側面が存在する。だから、死を包み隠さず口に出すことによって、例えば死を目の前にしたときに、必要以上に不安にならずに、残された時間を有益に使える、という点を考慮すれば、死を直視するのを手伝う教育という手段にわれわれが頼るだけの価値が出てくるかもしれない。そして、現代社会において家庭にその機能が期待できないのであればなおさらである。

ただ、このように「いのちの教育」を必要だとみなす根拠を限定して示せばいいが、実際には、「いのちの教育」の実践者たちは、それぞれがめいめいの思想信条によって、まちまちな目標設定と教え方をする。非常に広範囲に、「いのちの教育」について教えようとする実践者が多い。それは、ある意味、広範囲であるがゆえに、どこかで効果的な場面が訪れるだろうといった期待の現れか、もしくは何を教えていいのか分からないという不安の表れかもしれないが、そうなってしまうと、もはや教育効果は望み薄である。教育

---

<sup>40</sup> 長谷川眞理子「日本の若者はなぜ世界で最も人を殺さなくなったのか」(『寺門興隆』所収、興山舎、2003年10月号)13頁。

を受ける側の児童生徒にしてみれば、何について学んでいるのか、輪をかけて不明瞭であろう。この意味で「いのちの教育」は、その目標を設定するのが難しく、何を目標に据えれば「いのちの教育」と言えるのか、現状では、教育者間で共通認識のない、手探りの段階ではないだろうか。

## 今後の課題

「いのちの教育」はとらえどころがない。その実施時機をめぐっても実践者は苦心しつつ、すぎる理屈を探しているが、なかなか厳しい道のりである<sup>41</sup>。その原因としてあげられるのは、まずもって「いのち」がとらえどころのない概念だからである。次に、根拠を明確に設定しにくいという面もある。だれもが必要な気持ちになり、それでいてなぜ必要なのか説明はできない、というまどろっこしい性質のものである。ただ、丹念に理屈を突き詰めていけばどこかで、教育の必然性は出てくるだろうし、もし出てこなければ、このやり方はいずれ尽きる運命になるだろう。この分野の教育が廃れるかどうかは、適切なあり方を編み出すか次第である。実践家が教育目標を適切に設定できるような、科学的な研究の成果が望まれる<sup>42</sup>。

---

<sup>41</sup> 清多英羽「幼児期における「いのちの教育」の妥当性に関する一考察～その実施時機と在り方をめぐって～」(『教育思想』40号所収、11-26)、2013年。

<sup>42</sup> 清多英羽「学校教育におけるデス・エデュケーション(いのちを大切にする教育)の到達目標の設定の困難さに関する一考察」(『青森中央短期大学研究紀要』25号所収、9-17)、2012年。